

ささげものを盛るうつわ — 装飾付須恵器を観察する —

ここにあるのは、高杯形器台と子持器台と呼ばれる須恵器です。

奈文研とゆかりのある、奈良市内の所蔵家がおもちで、昨年所蔵品の年代や考古資料としての価値について相談を受け、調査をおこないました。出土地は不明ですが、考古学的な所見から、どちらも古墳時代後期、横穴式石室への埋葬にともなう葬送儀礼で用いたうつわであると考えられます。ほぼ完全な形である点は、資料的価値が高く、表面を波状文や、長方形や三角形の透孔で飾る様子も良く観察できます。

特に、子持器台は装飾性の高い須恵器の一つで、「親器」と呼ばれる台の上に、「子器」と呼ばれる、小さなうつわを付けています。この器台の子器は、中央に短頸壺、周囲に杯と広口小壺が取り付けます。杯と短頸壺には蓋が付き、蓋をかぶせた状態で焼かれたこともわかりました。

さらに、今回の調査では、高エネルギーX線CTを用いて詳細な観察をおこない、子器と親器の詳細な作り方を調べることができました。

ただし、残念なことに、うつわの中にささげものを入れた痕跡はみつかりませんでした。

奈良県内では、烏土塚古墳で5点の子持器台が出土していますが、出土例はそれほど多くありません。

では、これらはどこで作られ、どの地で使われたのでしょうか。

今後、さらなる分析を進めていきます。

(都城発掘調査部 松永 悦枝)



子持器台 (写真は原寸の50%)

焼成時の痕跡等から、中央と斜め右上方の蓋は本来組み合わないことがわかった。



器台の高さ：高杯形器台 (左) 約 50 cm

子持器台 (右) 約 40 cm (蓋をかぶせた状態)